



アトスペースから 地域活性化を提言

村田達彦さん NPO法人西荻まちメディア・理事長

プロフィール：1944年、東京生まれ。杉並区善福寺在住。

遊工房アトスペースをベースに、国内外の若手アーティストの創作・展示などの支援や国際交流の活動を実践。2001年、電機会社退職後、アトを通した地域活性化などのNPOを設立し活動中。杉並区内のNPOと、協働活動などにも積極的に取り組んでいる。遊工房アトスペース <http://www.youkobo.co.jp/>
NPO法人 西荻まちメディア <http://www.npo-machimedia.org/>

■会社人間、地元へ帰る

間もなく定年を迎える団塊の世代の受け皿としても注目されるNPOだが、“地縁”を持たない人たちにとっては、地元地域は入りにくいものだろう。現在、西荻まちメディアの理事長を務める村田達彦さんの場合は、奥さん達の活動に仲間入りする形で、アトを通した地域活動を始めた。

村田さんは、もともと地域活動に少なからず興味があり、50歳くらいになったら勤めを終え、地域に根ざした活動をしたいと考えていた。

50歳くらいになったら仕事を離れ、地域でアトをベースと一緒に何かをやらうねと約束した。ところが、大手電機会社での仕事にどっぷりはまり、なかなか現実には実行できなかった。世間一般のビジネスマンの多くがそうであるように、村田さんにとって、地元は寝に帰る場所に過ぎない。そんな村田さんを後目に、奥さんは、地元子どもたちやお年寄り向けの絵画教室やワークショップを開催するなど、着々と地域でのネットワークを広げていた。井草八幡宮に近い善福寺にある元診療所兼療養所が村田さんの実家だ。医者を経がなかった村田さんは、そのスペースを奥さんや仲間の美術教室やアトリエの美術活動に開放してきた。

50代半ばをすぎ、やるなら体力もある今が最後のチャンスと考え決意した。地元小学校の同級生達が温かく迎えてくれたことも励みとなり、地域活動のスタートを容易にした。

とはいえ、親族に美大教授、画家、ギャラリストなど美術関係者がすくなくからずいる、アト的な環境はあったものの、村田さん自身はアトと無縁のサラリーマン世界しか知らない。そんな自分にできることは何だろう。長年の会社生活で培った組織運営・管理のノ

ウハウを使って何か役に立てないかと、東京商工会議所が開催していたNPO起業塾に席をおいたり、学芸員の資格取得など勉強もはじめた。

地元で一番初めに、相談をかけたのは、商店街の方々であった。アトとまちづくり活動を一体化できぬかと考えたからだ。そして2002年、NPO法人西荻まちメディアが設立された。

■アトを通し地域を 活性化する



▲科学とアト 子どもフェスティバルのポスター

西荻窪は吉祥寺と荻窪という繁華街の谷間にある静かな佇まいの住宅街で、昔から古本屋や古道具屋、銭湯などが多く、学生や文化人に人気の街だった。小さなお店が集まる駅前、善福寺公園と井草八幡宮という広大なスペース、そして閑静な住宅街。西荻らしい佇まいは戦禍にあうこともなく、現在に至

るまで守られている。

そんな地の利を生かし、アトを媒介に思いついたことを次々に仲間達と実践してきた。善福寺公園の野外アト展や井草八幡宮の神楽殿での薪能をはじめ、中学校の野外映画会、小学校でのアトを通した土曜教室や、一般家庭の玄関に自作のアト作品を展示する企画、ギャラリーや骨董品店のスタンプラリーなど、身近にアトを楽しめる機会をつくって、人と人が自然につながるような活動を行っている。共通分母はアトだが、その活動は多岐にわたる。

■地元への想いから 地域全体への活動へ

区内のNPOやボランティアの活動を支援してきた「杉並NPO・ボランティア活動推進センター」は、2006年4月以降、「杉並ボランティア活動推進センター」と「すぎなみNPO支援センター」の2つの組織に別れて活動することになった。NPO支援センターを運営するのは、杉並区内のNPOの有志たちが集まって立ち上げた中間支援組織「NPO法人・NPO支援機構すぎなみ」である。村田さんは選ばれて、その理事長に就任した。NPO法人等の支援とボランティア活動を活発にするのがセンターの役割だ。そのために、地域情報や行政情報を発信して一緒にまちづくりの実践活動をして行こうと呼びかけている。その中には、杉並区が打ち出している協働事業によるまちづくり施策なども含まれている。

アトを媒体に西荻地域の活性化を推進してきた村田さん。その経験を生かし、2006年は、より広い視野に立ち、杉並区のNPOやボランティアの活動を豊かにし、杉並区全体を元気にしたいと願っている。

↘

■“後輩”の皆さんへの メッセージ

NPOの活動を持続するには、資金も必要だが、村田さんは、それ以上に「人」を重視する。NPOを持続させるには、熱意と、どれだけの仲間が集まるかが決め手だという。若い後継者も必要だと考え、活動の合間をぬって、美術大学・専門学校などにNPO活動のPRに出かけ、イベントの手伝いに誘ったり、卒業後のNPO活動への参加を呼びかけたりしている卒業して地域に戻ってくる人たちへのアドバイスも聞いてみた。

「大事なことは地元を見る、現実を直視すること。杉並であれば、区が何をしているか、自分の近くの町会、商店会や学校が何をやっているかを、まず知るべきだ。その上で、これまで自分のやってきたこと、仕事で培った知識やノウハウを役立ててほしい。その際注ぎたいのは、頭の中から、それまでの組織での肩書きを捨て去ること。まず現実を知ること。その上で、自分が役に立つには何をすればいいのか、何ができるのか、という順番で考えるといいのではないか」という答えが返ってきた。

趣味に熱中する、田舎で自然と親しむ、海外で暮らすなど、定年後の選択肢にはさまざまある。村田さんの場合は、「地域に生きる」ことを選んだ。新しい人間関係をつくったり、自分を見つめ直すことで、まだまだ自分にやれることがあることを発見した。その喜びが活動の原動力になっているのだろう。組織で培った知識やノウハウも地域活動の中で生かすことができる。しかも、窮屈なタテの関係ではなく、横並びの自由な関係の中で…。それこそ、第二の人生というにふさわしい生き方ではないだろうか。

（文：村田静保）